

F D 研究：すぐに「難しい」という学生への対処を考える

日下 和信

大阪キリスト教短期大学

1. はじめに

大学のユニバーサル化に伴い、高等教育を受ける人口の割合が飛躍的に高まってきた。その影響もあって、多くの短大で「学力低下の問題」が、深刻化してきている。これは何も短大だけの現象ではないと思われるが、悪いことは重なるもので、少子化で学生の競争意識が薄らぐと同時に、「ゆとり教育」と言われる教育体制下では、“態度・意欲”を評価の対象にしたはずなのに、「学習意欲のある学生がますます少なくなってきた」。そうなった根本原因は、高校生が多くが、「なぜ勉強するのか」という目的に無自覚で、「大学入試に受かるために勉強している」ためであると考えられる。しかし、その状況を作り出しているのは他ならぬ大学の入試体制であるから、高校を批判するよりも大学側が自らを考え直す必要があるというべきであろう。高校では受験・進学指導が浸透し、記憶術を競うかのような受験勉強が当たり前になってきていて、**高校卒業生の多くが、「勉強とは、憶えることである」と誤解している**。それを確かめるには、新入生に聞くだけでよい。そして、一部の優秀な例外的学生を除いて、大半の学生は、入学時「大学で何をすればよいか」、「大学に何の目的で入学したか」ということについて自分の解答を持っていない。これが現代の日本の大学を取り巻いている非常に深刻な大問題だと思われる。現状では、大学に入る目的が、“学問を深めることと、自己の人格の向上”のためにとということさえ知らないし、そんな問題意識すらない新入生が多いのではないかと思われる。大学教員は、この現状を素直に認め、学生に「自分の人生のために学ぶのだ」という自覚を持たせるためにも、関わりを持って行かねばならなくなっているのである。専門知識を教えるだけで、大学教員の勤めが完結しなくなってきた時代のようなのである。

2. 学生が、すぐに「難しい」と、まるで教師をとがめるように言う

10年前ならば、「難しいことを学びに大学に来たのでしょ、すぐに難しい難しいと言ってはいけません」と、たしなめることが出来た。しかし、昨今の学生が「難しい」と訴える雰囲気は、10年前と余程変わってきた。“自分が解らないことを教える方が悪いかのような雰囲気”で教員を咎めるように言うのである。解り易く教える努力は教員側に必要なのだが、半数以上に解るように教えても、解らないと「不満」を口にする。**大学に難しいことを学ぶために来ていないので、簡単に理解できなければ不満なのである**。殆どの学生は、「学問に王道なし」という諺を知らない。そのために、難しさに耐えて学問を修めるという発想がそもそも無い。実に嘆かわしいことだ。このような**学生気質の変質**を教員側は十分頭に入れて置かねばならない。

3. 半数の学生が「興味のある所だけ授業を聞く」と回答

簡単な授業アンケート調査をしてみた。母集団の数(32+20)が少ないので、参考程度にしか成らないけれど、その中で授業に臨む態度の設問(問7、7肢選択)も作った。その間で、半数の学生が「興味のある所だけ授業を聞く」(問7の3)と回答してきたことに“やはりそうか”と妙に感心してしまった。この回答は意味深長である。この選択肢は、筆者自身の体験からは考えにくいものなのだが、今教えている学生の行動パターンで気になっていたから付け足した選択肢であった。それというのも、**昨今の学生は「急に寝るのである」**。直前まで真剣に聞いていたようなのに、あるところで急にばたんと机上にうつぶせに寝るのである。常識的に、また5年前ならば、少し解らないことを話していても、

しばらくは耐えて聞き続けるのだが、今の学生はすぐ寝るのである。そんな学生が多数出現してきた。その理由は、今後調査する必要があるのだが、推量すれば、今の学生は“知識とは断片的なもので、一つずつ覚えていくのが学習だ”と思っているようなのだ。受験勉強が一般化して、勉強とは（前後の脈絡無しで）憶えればよいのだと考えている学生が増えてしまったのである。“理屈が繋がりに、結論が導かれるためには、段階を追って考えを進めなければならない”という当たり前の思考の原則が理解されていないように感じられるのである。そうでなければ、折角興味を持って聞き始めた話に関して、結論を待たずに「切り捨てて寝てしまう」道理が理解できないからである。その前の選択肢（問7の2）「解ろうと頑張るが努力が続かない」の回答と合わせると79%（41/52）の学生で、解らなくなれば関心が離れるのである。学力の中位以下の学生の変質は、このレベルまで来てしまったようである。そして、それに続く選択肢で「授業で解らなくなったら、寝る」とか、「私語をしてしまう」と回答して来ているのである。

問7 授業に臨む態度

- 1,解ろうと前向きに受講している。2,解ろうと頑張るが努力が続かない。3,興味の乗るところだけ聞く。4,解らなくなったら寝てしまう。5,ついつい私語をしてしまう。6,私語で注意される。7,私語でしばしば注意される/回答数
① 6, ② 14, ③ 27, ④ 6, ⑤ 5, ⑥ 2, ⑦ 1（重複有り）

要するに、“興味のある所だけ聞いて、つまらなくなれば興味なし”で耳も目もスイッチを切るのである。そして、質問も余りしないのである（問5の5）。「何としても解ろうという気持ち」を持っている学生は今や貴重品である。「日常的な学生観察」から推測して言えば、昨今の学生にとって、大学の授業もテレビ番組も同じで、「面白いところ・解るところ」だけを見聞きして、それで良しと考え、満足してしまう感覚に成っているのである。

4. 「理屈で考えること」と「人生のために学んでいること」を教えないと

情けないと思っても、上の2つのことを教えないわけにはいかない。多くの学生が教えられていないし、現に知らないからである。学期始めの授業で、「憶えることが、勉強だと思っているか？」と、是非聞かないといけない。そう思っている新生は、正味多いのだから。挙手させてみるのである。“勉強するとは”どうということだと高級に聞いてはダメである。答が浮かばないからである。具体的に先のように聞いてやることである。挙手するまで待ってやると、正直に手を挙げてくれる。そして、自分が授業をする学生の実態を確認することが欠かせない。多くの手が上がれば、「憶えることが勉強でないこと」から教えて行かざるを得ないのである。実際に「考える作業」をさせて、“考える勉強”を体験させなければ、勉強に対して大きな誤解を持ったまま大学の勉強を始めてしまうであろう。「難しい」が口癖の学生への対処はさらに大変である。じっくり考えて解ったという経験が乏しいと思われるので、そのことを経験させねばならない。筆者自身、取り組みを始めたばかりだが、その場合は二重の意味を考慮しながら対処しなければならないと考えている。当面の課題としては、学びつつある学問の具体的内容でもって、“解った時の認識の発展とその面白さ”について、本人に解らせてあげること。そして、その奥の課題としては、“大学で学ぶということの意義を教え、悟らせねばならないこと”。学問性を抽象的に解らせる。即ち、難しさに耐えて、学問的な内容を理解していくしか方法が無いことを納得させること。本気に取り組みればこの作業は、教員にとって大変な負担である。ただ、短大では、このサービスは多数の学生に必要な成ってきていて、放置できない課題になってきているということである。「難しい難しい」と言ってきたら、叱るよりも、不満な話を受け止めて聞き、専門知識を教える授業の中に、「学問を、人生を教える授業」を組み込み教えて行かねばならない時代になったようである。